



「老人の生活ケア（＜生活障害＞への新しい看護の視点）」

三 好 春 樹 著

この書を手にしてまず感じたことは、通常目にする既存の成書にみられるような、総論、各論に分類された感覚とはほど遠い、ユニークな本であるということである。

このことは著者である三好氏も、この書の序文で（変な本）と宣言している通りで、たしかに良い意味でそうであろう。

目次構成は、以下のように〔1〕から〔7〕までにまとめてあるが、関連肝要事項については、必要に応じて、随所に ONE POINT MEMO や、図、表として挿入し、読者の便をはかっている。

- 目次：1. 老いは自然過程にすぎない
 2. 生活再建のためのケアプラン
 3. 介助学入門
 4. Nさんにとっての＜ロシア＞・痴呆老人考
 5. Kさんの ナースコール・障害老人へのかかわり
 6. 地域リハビリテーション・その思想と方法論
 7. ブリコラージュとしての リハビリテーション

次に目次内容についてみると、自然現象としての老いを如何に迎えるかに始まり、この老年期を主体として如何に生き抜くべきか、そしてその可能性高揚のために、隣

人として当為性に立脚した人間性発露の必要性に触れ、さらに痴呆などの重複障害に悩みつつ、生きなければならない老人の実態の分析と把握、さらにそれらを通じ、リハビリテーション理念の実現のための局在的努力から広域的浸透への、思想的展開と実践的方法論について言及し、最後に人間の創造性の必要と、それへの大いなる期待について力説している。

市井には老人関係の書籍も数多く出版されてはいるが、この書にみられるように目次の〔1〕から〔7〕までの内容のすべてが、試行錯誤の日々の苦難の舞台を通じて、はじめて獲得できた汗と涙の結晶であるような書物も少なからう。

リハビリテーション医療分野にて生涯すること30年、実年に達した自分としても、能動的、受動的両面からの視点を余儀なくされる存在として、この書の一読により、大地に基盤を持つリハビリテーション医療を認識でき、求めるべきリハビリテーションの理想像と共鳴させたと信ずる。医療や福祉関係者のみでなく、老期は避けえない人間としての、意義あるライフ・スパンのためにも必読の書である。

（A 5 判，頁222，図38，写真43，¥2,300，〒300
 医学書院 刊）

（九州リハビリテーション大学校
 理学療法士 和才 嘉昭）